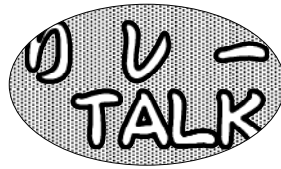




佐藤清純さん

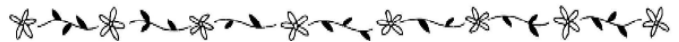
元豊橋市職員
元豊橋市職労委員長



NO. 13

随想。私と自治体のしごと

自治体に働くみなさんは、
『住民目線の市政』を推進する原動力です。
まず対話から始めましょう。



私は、1974年に豊橋市役所に勤め、2008年3月退職までの35年間に公務員として働きました。そのうちの30年は教育委員会事務局勤務で社会教育関係の仕事に関わりました。市民参加の生涯学習事業を展開したり、地域の特徴を生かした公民館活動に知恵を絞ったりと、いろいろな思い出があります。

労働組合の活動は、市職労教育支部の書記長をスタートに30年余の関わりで、市職労書記長・委員長は通算22年と、いささか長過ぎた感、ありますね。

1974年当時は、自治体労働運動の前進・高揚期で、革新自治体が全国に広がるなど、社会全体が進歩・革新の息吹に満ちていた頃でした。「住民の繁栄なくして、自治体労働者の幸せはない」という大阪衛都連綱領に「学び、学べ」と、全国で運動が広がった時期でもありました。

豊橋市職労でも、役員と組合員のみなさん方の大奮闘で、「ひまわり号を走らせる会」、保育料値上げ反対の大署名行動、「ゴミを考えるシンポジウム」「朝倉川クリーン作戦」、「おいでんコンサート」など、数多くの自治研活動や、市民団体・民主団体との共同行動を取り組んできました。

なかでも1998年に取り組んだ「豊橋市民病院の充実を求める要請」署名は、約半年間の

取りくみで、103,245筆を集約するなど、空前のとりくみとなりました。自治体労働者と市民が手を携えた時には、大きな前進が始まることを確信しました。

進歩・革新の運動が前進すれば、反動の攻撃、嵐がつよまることも歴史の法則でしょうか。小泉内閣以降の公務員攻撃はすぎましいもので、今なお、橋下徹大阪維新の会を先頭にふきあれています。住民・市民と公務労働者を敵対させながら、連続した賃金切り下げと人員削減攻撃などで自治体労働組合の闘争力を切り崩すなど、本当にすぎましいものです。

こうした情勢では自治体に働くみなさん方・労働組合も、どうしても「守勢、内向き」になりがちです。でも、「住民福祉を充実してほしい」という市民の要望は、本当に切実になっています。

自治体労働者・労働組合と市民との共同行動、まずもって対話が求められている情勢だと感じています。